

「致庸、聞こえた？ さっきわたしたちの前に座っていたのは勅命大臣と山西總督だったのね！」

致庸は外に向かって歩きながら屈託なく笑った。

「そうかい？ この喬致庸がたつたいま朝廷の重臣の方々にご挨拶申し上げたとは驚きだな！」
孫茂才は影絵芝居小屋の外にしゃがんで落花生を売っていたが、しきりと売り物を食べながら本を読んでいる。そばでお焼きを売っていた若者がからかった。

「おい、あんたって人は、売るより食ってる方が多いんじゃないか」
茂才は顔もあげずに言った。

「おまえに何がわかる？ おれはな、落花生を一袋背負って太原府に郷試を受けたに來たんだ。売りさばけばその金を宿代や飯代に当てるし、売れなきや自分で食うまでよ。なんで食っちゃいけないんだよ？ おれが落花生を食わなきや、おまえのお焼きをくれるってのかわか？」

若者はとんでもないと手を振りながら冗談を続けた。

「へえ、それじゃおれもちよつと食ってもいいかい？」
茂才はまるで気にしなかった。

「食え食え！ 遠慮はいらん」

致庸はこの一幕に少し驚いた。目の前にいる三十になろうかという男は、妙に人を惹きつける一種独特な雰囲気を持っている。致庸は素知らぬ顔で自分もうすぐまり、勝手に落花生を食べ始めると、首をのびして男に尋ねた。

「秀才さん、それはなんの本だい？ どうやら〃三月肉の味を知らず〃ってくらい夢中になっ

ておいでの様子だけだ」

茂才はびつくりして読んでいた『船山文集』を閉じると立ち上がった。

「おい、おまえはだれだ？ なにをしている？」

致庸も立ち上がって笑った。

「別になにも。落花生を買おうとしているのさ」

たまたまおやつを買おうと出てきた陸玉菡が、チラリと茂才を見やると笑みを浮かべて傍らに立った。

茂才は致庸をじろじろと見ると、竿秤に皿を載せて量りながら口上を述べ始めた。

「さてこの秤をご覧じろ、高く掲げてお見せしよう、二斤四両（斤、両は重さの単位。原著では一斤 \parallel 十両で換算 一斤 \parallel 約六百グラム）だ！ 銅錢五十枚で一斤、三八二十四、四八三十二、さあ二百四十文だよ！ お安くしとくよ！」

致庸はじつと茂才に視線を当てたまま錢を取りだすと放って寄越した。茂才は大きく口を引いてニヤリと笑った。

「どこに乗せる？ あなたの代わりに持ってやるわけにはいかんからな」

手頃な紙が見あたらなかったので、致庸は出発前に喬致広に手渡された封書を取りだして無造作に広げた。

「さあ、この上に空けてくれ」

茂才は落花生を空けながらつぶやいた。

「おれは別に商売でやってるわけじゃないんだ、せいぜいおまけしておくよ。よし、行った行っ

た、読書の邪魔をしないでくれ」

そこへいきなり現れた玉菡が口をはきんだ。

「書生さん、ちよつと待って、この落花生売りに騙されましたよ！」

言い終わらぬうちに茂才がわあわあど騒ぎだったが、玉菡は取り合わず続けた。

「この落花生は大錢五十で一斤、二斤四両なら、二五十、四五二十、合計で百二十文になるはずです。それなのにこの人の言い値は二百四十文、まるまる二倍もふっかけられたんですよ！」

致庸は顔をあげると、玉菡の美貌と暗算の速さに驚いた。致庸の返事を待たず玉菡はニツと笑うと茂才の秤を取りあげて皿の下から磁石を剥がし取った。

「おやおやこれは何だろう？ この磁石、少なくとも二両はありそうですね。落花生一斤につき少なくとも二両はちよるまかされた計算になるとして、二二が四、二四が八、あなたが買った二斤四両に対して合わせて四両八錢（錢は重さの単位。一斤 \parallel 十兩 \parallel 百錢）ごまかされたことになりました。二斤四両から四両八錢を引くと、ほんとうに買ったのは一斤九兩二錢ですから金額は一斤につき百二十五文ということになります！」

「きさま、いらぬ口出ししやがって——」

カツとなった茂才は理不尽なことを言っからみ始めた。

「そうか、あんただな、今日商店街でおれに馬車をぶつけておきながら、まだ謝ってもらってないぞ」

玉菡はカチンときた。

「あなたという人は、まじめに商売しないばかりか、そんな難癖をつけたりして……」

致庸はしげしげと玉菡を見つめ、それから茂才を見やり、カラカラと笑いだした。玉菡と茂才はぎよつとなり、茂才はむつとして顔をそちらに向けた。

「なにがおかしい？ 落花生をいくらからちよるまかしただけのことだろう？ わかったよ、ほら、あんたの落花生だ、持って行け、銭などいらん！」

茂才は銭をつかむと致庸の手に押しつけた。致庸はかぶりを振って銭を茂才の手に押し戻すと、玉菡に向かつて拱手した。

「実に美男子でいらつしやる。お目にかかれて光栄です」

玉菡はぼつと頬を染め、慌てて拱手を返すと「こちらこそ」と応じた。

「手前、山西祁県喬家堡の生員、喬致庸と申します、さきほどはどうもありがとうございます。ほんとうに計算が正確で、しかも速くていらつしやる。心から感服いたしました。しかし商売というものはそういったものではありません。時には少しいい加減などころもあります」と、そうそういつも嚴格にやっていたのではね」

そう言つて拱手すると、玉菡と茂才の返事も待たず悠々とその場を立ち去つて行つた。

玉菡も茂才も去つて行く致庸を呆然と見送つた。茂才はいつとき玉菡と衝突したことも忘れて問い掛けた。

「なあ、あの男、いま何て名乗つた？」

玉菡はかすかに顔を赤らめた。

「山西祁県喬家堡の方で、お名前は喬致庸と……」

影絵芝居の小屋で雪瑛がじりじりしながら待っていると、致庸と玉菡が前後して入つてきた。

玉菡はどうにも気になつて致庸たちの卓に目をやった途端、雪瑛の視線とぶつかつてしまった。

ふたりとも少しびくつとなつた。致庸はにこやかに席につくと、雪瑛に落花生を手渡した。一瞬虚をつかれた雪瑛だが、じきに致庸に文句を言うのを思い出した。

「どうしてこんなに時間がかつたの？ こんなところにひとりつきりにするなんてひどいわ。もう戻つて来ないのかと思つたじゃないの」

しかし、致庸が落花生を次々と抛りあげてお手玉をしてみせると、あつという間に機嫌を直し口を覆つてクスクスと笑い始める。

一緒に落花生を食べているうち、雪瑛は落花生を包んでいた手紙に気づき致庸に指さして見せた。致庸は落花生を卓上に空け、何気なく文面に目を通した途端、顔色を変えた。雪瑛も手紙を手にとるとやはり顔色を失つた。

「なんですって、お従兄様の病気はそんなにひどいの？ 今度の郷試は最後の機会だ、もし挙人に合格できなかつたら家を継がせるって書いてあるわ……なんてこと、お従兄様はまさかほんとうにあなたに商売をさせるつもりなの？」

致庸は雪瑛の腕を掴んで立ちあがった。

「早く行こう、うちの店に戻つて、八股文の復習をするんだ。今度の挙人の試験には、合格しなきゃ！」

「どつして？」

致庸は答えなかつた。

そそくさと出ていく致庸と雪瑛を見つめながら、玉菡の胸がザワリと鳴つた。陸大可は一口

茶をすすると、たまりかねて尋ねた。

「なあ、玉児たまごや、だれを見ているんだい？」

玉齒たまごは頬ほに紅葉を散らすと慌てて話をそらしてしまった。